

# 身捨つるほどの祖国はありや

—なぜいま「教育勅語」なのか、天皇制ナショナリズムとの闘いへ—

講師 黒田伊彦(くろだよしひろ)さん

1936年生まれ。元・関西大学教員。現在、「日の丸・君が代」強制反対大阪ネットワーク代表、部落解放人権研究所正会員など。著書に『解放教育実践論(上)(下)』/『部落史紀行』/『部落問題・人権・同和教育教材集』など。 \* 「身捨つるほどの祖国はありや」は寺山修司名言集(2003年発行)の表題。

【日時】 2017年 8月 15日 (火) 午後 2 時から

【場所】 日本キリスト教団 洛陽教会・地下ホール

京都市上京区寺町通り丸太町通り上がる (電話075-231-1276) 京阪電車「神宮丸太町駅」から西へ5分、地下鉄「丸太町駅」から東へ10分

【会場カンパ】 800円

■「明治」への回帰策動と「教育勅語」復活・「道徳」の教科化を許すな！ — 天皇退位より廃絶の闘いへ！

今年、1937年の盧溝橋事件、中国侵略全面戦争から80年であり、その戦争責任を不問にしたまま、日本国憲法が施行して70年の節目の年である。1937年は「天皇機関説」を否定し、神がかりの天皇制の国体明徴運動の中で、政府は「国体の本義」をもとに戦争への「国民精神総動員体制」を展開した。「母の背中に小さい手で振ったあの日の丸・・・」という日の丸行進曲とともに、町会を通じて日の丸掲揚を推進、戦意高揚を図った。同じ1937年、これらの精神的支柱である教育勅語体制に抗して吉野源三郎が、15歳のコペル君を主人公にした『君たちはどう生きるか』を刊行した。この本は、今も教養教育の古典として読み継がれている。人間としてどのように生きるのか、と同時に、自分はどのような時代に生きているのか、を問うている。今日の状況は、まさに80年前と同じ、私たち一人ひとりに「国の形」が問われている。

■ 軍国主義と天皇制ナショナリズムの台頭を許さないために — 主権在民・民主主義に天皇はいらない！

いま、安倍政権は「日本国憲法による戦後レジームからの脱却」と称して、立憲主義・民主主義を壊し、海外での自衛隊の戦闘を可能にする「戦争法」を、さらに今年、批判活動を封殺する「共謀罪」法を強行採決した。そして、戦争する国を支える精神としての「教育勅語」復活と「道徳」の教科化による「全国の森友学園化」を画策している。それは11月3日の「文化の日」を「明治の日」にする動きや、天皇の生前退位による象徴天皇制再編による天皇賛美の意識と、「自衛隊合憲化」の改憲を支える意識とが結びつき、それが「国民意識」という情勢になろうとしている。それは「敗戦前」の国家統制の強い、物言えぬ「天皇制国家」へと逆戻りすることに他ならない。いま、安倍政権打倒と天皇制のあり方が論議される中、天皇制廃絶を含め、どう闘うかを、ともに考えてみたいと思います。ぜひ、ご参加ください。

主催 日本キリスト教団京都教区「教会と社会」特設委員会 / 京都「天皇制を問う」講座実行委員会  
反戦・反貧困・反差別共同行動in京都 問い合わせ先:090-5166-1251(寺田道男)